



ありあけ

●発行日 2012年7月1日
●編集 会報編集委員会

●発行 佐賀大学農学部同窓会
住所 佐賀市本庄町1 佐賀大学内

TEL 0952-23-1253 FAX 0952-25-5700
E-mail dosokai@ai.is.saga-u.ac.jp
ホームページ http://dousou.saga-u.ac.jp/



美術館建設記念事業へのご協力を

農学部同窓会会長 金丸安隆

平成22年6月の第25回農学部同窓会総会において会長に選任され、早いもので2か年が過ぎました。さらにこの5月19日の第27回総会において再任をされましたので、よろしくご協力のほどをお願い申し上げます。

この2年間に同窓会本部総会の活性化及び本部支部交流の促進等に取り組み、総会では総会行事として、講演や学生による演奏会、そして恩師を招待しての懇親会を催し一定の成果があったものと思います。

交流促進では予算の範囲内で会長他農学部の先生も支部総会に参加し、交流を深めることが出来ました。さらに本部総会に県外支部をご招待し交流促進を図っています。

また、会報「ありあけ」の発行では、研究室紹介や会員の広場、職場だより、支部活動の報告、思い

出の写真、カラー写真掲載など工夫され、会員の皆さんに興味関心を深めてもらう内容となっています。

さらに平成25年10月は佐賀大学と佐賀医科大学との統合10年を迎え、その記念事業として美術館が建設されます。全学同窓会としても全面協力態勢で全学同窓会として1億円の募金目標を定めています。佐賀県内に4年生大学はわずか2校で総合大学は佐賀大学のみであり、文化の香豊かな大学でありたいと思います。

美術館建設の趣意書等は7月1日付けで会員の皆さんに郵送されますので、格別のご協力をお願い致します。

これからさらに、総会の活性化、本部支部交流の促進、収入予算の確立、事業の見直し等に取り組みたいと思いますのでよろしくご指導、ご鞭撻のほどをお願い申し上げます。

平成24年度農学部同窓会 通常総会

佐賀大学農学部同窓会の第27回通常総会が平成24年5月19日、理工学部6号館で開催されました。来賓として熊本県支部から高松孝行（S52年卒・作物）氏のご臨席を賜りました。

現在、農学部同窓生は全国に約6,900名、在校生を加えると約7,600名になります。今回の総会には佐賀県内各支部などの同窓生諸氏約80名の出席がありました。



金丸会長 挨拶



総会の内海議長



来賓 高松孝行氏

総会は、金丸安隆（S43年卒・畜産）会長の挨拶、物故者への追悼後、議長に内海修一（S47年卒・農経）氏を選出し、事務局から平成23年度事業・収支決算、平成24年度事業計画・収支予算などの報告、これ

に対する質疑応答、採決を経て承認されました。

また、役員改選では諸課題への継続的対応を図るため、会長初め役員の一部が残留して新たな役員とともに平成25年度までその任に当たることになりました。

なお、詳細は次頁をご覧ください。

総会終了後、佐賀大学保健管理センター 佐藤武所長による「我が国におけるメンタルヘルス最前線～中高年に忍び寄る“うつ病”問題～」と題する約50分の講話を拝聴しました。全国に約300万人を越す患者、年間自殺者が3万人を超える状況などには過度の合理化、競争原理がその要因であるとの指摘がありました。日本のみならず、韓国、中国、台湾、ニュージーランドなどの事例も紹介され、「うつ病」の予防として、集う（語る）、歩く（運動）、飲む（食べる）こと、特に人との絆が有効であるとのことでした。本同窓会も会員相互の絆を原点としてきましたが、今回の講話はその活動を更に推し進める契機になりそうです。

最後は、佐賀大学在校生のサークル「佐賀大学混



記念講話 佐藤所長



当日の会場

声合唱団”コーロ・カンフォーラ”による「学生時代」、「となりのトトロ」などの曲目が演奏され、また最後には会場からの拍手に応じてアンコール曲もあり、感動した一時でした。現在、本合唱団は住吉美紀団長のもと、約80名の団員が50年の伝統を引き継いでいるとのことでした。今回は農学部の6名、指揮者（吉浦真登他1名）など約40名の出演に会場から盛大な感謝の拍手が鳴り続けました。

その後は学内の「かささぎホール」で懇親会を開催、佛淵学長はじめ本部及び各学部同窓会、農学部からは藤田学部長、和田副学部長、高木胖、田中欽二両名誉教授などの来賓、同窓生諸氏約60名が参加されました。好例の不知火寮歌「南に遠く」は花田健児（S47年卒・植物病理）氏の巻頭言、これに続いて歌と輪踊りがなされ、最後は藤田農学部長の万歳三唱で閉じました。

なお、これまで総会の前になされていた農学部主催の「公開シンポジウム」は今年は9月に開催されるため、同窓会単独の催しとなりましたが、昨年からの講話、学生サークルの出演は今回も好評でしたので、次回も実施される予定です。来年度の通常総会については後日通知されますので、今年以上の参加を願っています。



混声合唱団の演奏



懇親会 巻頭言は花田会員



懇親会

平成23年度事業報告及び収支決算

事業報告

- 平成23年度において、次の事業を執行し、農学部同窓会の円滑な運営、支部活動の充実に努めた。
- 大学と同窓会との意見交換会を開催するなど相互に連携した取組を行った。
 - 会員相互の絆を支える会報「ありあけ」第8、9号を発行、配布した。
 - 大学主催のキャリアデザイン講座や就職ガイダンスの講師として会員を派遣した。
 - 農学部及び全学同窓会支部の総会等に役員が参加し交流を図った。
 - 同窓会員名簿のデータ管理を更新し会員への閲覧を行った(ただし、個人情報管理は厳守)。
 - 新入学生の入会金、会費10年分の会費について、全学同窓会と本学同窓会との配分割合を従来の6対4から5対5に改めた。
 - 会費納入促進を図るため、従来の後納制から前納制に改め、これまでの未納分を免責としたことにより、会費納入が向上した。

収支決算

(1) 一般会計 (H23 4.1~H24 3.31)

【収入の部】

科目	23年度実績
前年度繰越金	789,534
会費	5,023,000
学生(新入生)	3,234,000
一般会員	1,789,000
雑収入	166,285
特別会計戻入	1,000,000
計	6,978,819

【支出の部】

科目	23年度実績
事務費	1,044,384
会議費	521,328
事業費	1,006,593
組織強化費	273,135
全学同窓会負担金	1,617,000
特別会計への繰出金	1,318,500
新入生入会金	73,500
会費平準化準備金	1,245,000
予備費	0
計	5,780,940

【差引額】

収入の部 6,978,819円 - 支出の部 5,780,940円 = 1,197,879円(次年度繰越)

(2) 特別会計 (H23 4.1~H24 3.31)

【収入の部】

科目	23年度実績
前年度繰越金	15,066,211
一般分 a	9,189,751
会費平準化準備金 b	5,876,460
入会金 c	73,500
会費平準化準備金 d	1,245,000
雑収入 e	2,568
計	16,387,279
一般分(a+c+e)	9,264,010
会費平準化準備金(b+d+e)	7,123,269

【支出の部】

科目	23年度実績
繰出金	1,000,000

【差引額】

収入の部 16,387,279円 - 支出の部 1,000,000円 = 15,387,279円(次年度繰越)

佐賀大学農学部同窓会役員 (H24・25年度)

担当役職	氏名	卒年・学科(専攻)	担当役職	氏名	卒年・学科(専攻)		
会長	金丸 安隆	S43・農学(畜産)	理事	郡山 益実	H7・生学(浅海)		
副会長	川副 操	S44・農工(土改)		宮本 英揮	H10・生学(水利)		
副会長	光武 司	S51・農学(農経)		福田 稔	H1・農学(病理)		
副会長	有馬 進	S52・農学(農経)		北島 剛	H3・農工(土改)		
理事長	松永 章	S59・農学(育種)		福永 正照	H5・生学(作物)		
理事(編集長)	村岡 実	S46・農学(保護)		中原 典嗣	H2・農学(熱作)		
理事(16名)	白武 義治	S51・農学(農経)		石橋 誠	H1・園芸(果樹)		
	光富 勝	S51・農化(食品)		福田 喜隆	S63・農工(土改)		
	吉賀 豊司	H2・園芸(応動)		大久保清海	S41・農学(園芸)		
	田中 宗浩	H4・生学(施設)		澤野 兵五	S44・農学(育種)		
理事	田中 龍臣	S45・農学(園芸)	監事	杉町 信幸	S51・農工(土改)		
	福岡 直昭	S47・農工(干拓)		緒方 和裕	S55・農学(病理)		
	佐賀県庁支部長	森田 昭	S52・農学(農経)		佐賀県教職員支部長	山口 郁雄	S52・農学(農経)
	佐賀県農協連支部長	田中 治	S59・園芸(園工)		熊本県支部長	立場 久雄	S51・農学(作物)
	農業自営者の会長	山田 和由	S49・農学(農経)		佐賀県支部長	坂本 隆昭	S37・農学(農経)

監査報告

平成24年4月25日に佐賀大学内の「夢の実会館」において、平成23年度会計監査を実施したところ、会計諸帳簿及び証拠書類、預金通帳等いずれも適切に処理されていたことを認めます。

平成24年5月19日

監事 山口 郁雄

監事 溝口 善紀

平成24年度事業計画及び収支予算

事業計画

- 会員に対し同窓会をより身近なものとしていくため、支部の体制・活動をより充実するとともに、会報「ありあけ」第10、11号を発行するなど各種情報の提供を行う。
- 農学部と同窓会との意見交換会を開催するなど、相互に連携した取り組みを行うとともに、準会員である学生に対する支援を行う。
- 農業技術経営管理士(農業版 MOT)養成の取組に連携して協力支援を行う。

収支予算

(1) 一般会計 (H24 4.1~H25 3.31)

【収入の部】

科目	24年度予算
前年度繰越金	1,197,879
会費	4,620,000
学生(新入生)	3,520,000
一般会員	1,100,000
雑収入	200,121
特別会計戻入	0
計	6,018,000

【支出の部】

科目	24年度予算
事務費	855,000
会議費	640,000
事業費	1,135,000
組織強化費	530,000
全学同窓会負担金	1,760,000
特別会計への繰出金	680,000
学生入会金	80,000
会費平準化準備金	600,000
予備費	418,000
計	6,018,000

(2) 特別会計 (H24 4.1~H25 3.31)

【収入の部】

科目	24年度予算
前年度繰越金	15,387,279
一般分 a	9,264,010
会費平準化準備金 b	6,123,269
入会金 c	80,000
会費平準化準備金 d	600,000
雑収入 e	2,521
計	16,069,800
一般分(a+c+e)	9,344,810
会費平準化準備金(b+d+e)	6,724,990

【支出の部】

科目	24年度予算
繰出金	0

退職教員からのメッセージ



私の研究歴

半田 駿

(地圏環境学分野)

佐賀大学には、1982年に教養部に赴任し、同廃止に伴い農学部への転任がりましたが、合計で約29年間お世話になりました。農学部へは1996年ですので、任期の約半分以上が農学部でということになります。

専門は地球電磁気学です。地球の内部、外部で生じている電磁気的な現象の解明を目的としますが、やや特殊な分野でもありなかなか職を見つけることができませんでした。この間、生活のため主として大学や予備校の講師をしましたが、研究時間を確保するため1日6コマの強行軍日程もありました。新幹線で京都に近づくと東寺の塔がみえますが、このお寺の中に日本で一番小さな大学(種智院大学)があります。ここでも教員免許用の地学を教えていました。ある日、寺の中を歩いて大学に行くと誰もいなく、仕方なく帰ったのですが、この21日は弘法大師の祥月命日で大学は休みだったことが分かり、少々複雑な心境でした。

ある研究会の先生に紹介され、日本では通産省に当たるのでしょうか、カナダのEMRの研究所にビジティング・フェローという身分で1年間滞在し、研究を行いました。この研究所は、首都オタワにあ

るエクスペリメンタル・ファーム(実験農場?)内の農務省の大きな研究所の横にあり、冬には氷点下30度にもなるのですが、春から秋までは広大な農場内を自転車で通勤していました。事務所・図書室は古い天文観測のドームの下にあり、春はライラックの花の下をドブネズミのようなリスが走り回る、なんともどかな場所でした。当然、当時は農学と縁が出来ることなど考えたことは無かったのですが、長い人生にはおもしろい巡り合わせがあるものです。

佐賀大学着任を機会に九州の活断層、火山の構造調査をテーマにしました。これらは深度1km~150kmが対象なのですが、農学部に来てからは、浅い150m未満の探査が出来る装置を開発し、これを用いて防空壕等の確認調査も行いました。農学部での研究の話聞いていて、土壌水分量の測定等、地球電磁気学が対象とするものと、水を介して結構関係があることに最近気づきました。装置を開発しそれを用いて研究するのが私の研究スタイルですが、農業が対象とする土壌は浅部のため、高周波の電磁波を用いる必要があり、素人の工作ではとても手が出ませんでした。

授業では、地球科学、地球環境関係の講義や実験を担当しましたが、少々まじめに考えすぎて、カナダを含む自分の研究で得られた経験等は、あまり学生に話さないでいました。もともと生物に関心がある学生にとっては、ほとんど興味のない話であろうと思ったからですが、話し方によって少しは役に立ったかもしれないと、現在では反省をしています。



同窓会の皆様へ： 最終講義を終えて

柳田 晃良

(生命機能科学科
旧・応用生物科学科
旧・農芸化学科教員)

同窓会の皆様におかれましてはご健康でご活躍のことと思います。

私は1975年桜の季節に佐賀大学に着任し教員生活が始まり、2012年3月に定年退職を迎えました。こ

の37年間多くの教職員の皆様と学生に支えられながら教育・研究が楽しくやれたことを感謝申し上げます。佐賀大学では農芸化学科、応用生物科学科、生命機能科学科と時代とともに学科名は変わりましたが、一貫して食品栄養化学、食品成分によるメタボリックシンドローム予防・改善に関する研究が続けられたことをうれしく思っております。

整理してみますと、この間、卒論生170名ほど、修士課程学生30数名、加えて博士課程学生10名ほどを主指導教官として指導する機会に恵まれました。留学生も多く在籍し一時期には5カ国語放送ができたのは楽しい思い出です。研究室に所属したそれ

それぞれの学生は情熱と才能を発揮してくれています。博士課程修了生の多くは大学に採用され、研究/教育の第一線で活躍している。

外国からの留学生 John は現在国際学術誌の編集長に収まり、アメリカの大学で研究を続ける mizan は国際シンポジウムに招待され昨年凱旋帰国し、終了後には佐賀に来て学生たちにレクチャーをしてくれた。

中国からの留学生王玉明は私の研究室で学部、大学院と学術振興会奨学生（ポストドク）を含めて8年間在籍した最長不倒距離レコードの持ち主ですが、うれしいことに最近中国重点大学の一つである中国海洋大学の食品栄養関係の教授に40歳の若さで昇進している。韓国からの修了生も研究理事になりすばらしい活躍をしてくれている。

異例なことだと思うが私の研究室で博士過程を修了した日本学生井上、城内は旧帝大の教員として活躍している。一昔前には考えられないことである。

私の方針として大学院生には国内外の学会で報告する機会を作り、学術賞等には積極的に応募することを推奨した。結果的には彼らは国内外で数々の賞を受賞したが、そのことよりも多くの先生に報告を

聞いていただき討論の場を通じて学生の能力、性格や人格をアピールすることができた点である。このような機会を作ってやることは指導教員の一つの務めであると思う。研究室を巣立った学生がそれぞれの職場で活躍をしており、誇りに思うと同時にうれしい限りである。

さて、平均寿命が長くなった現代において定年後をどう生きるかは重要である。私は研究を続ける道を選び、春から西九州大学で研究室を立ち上げることにした。外国大学の客員教授もつとめる予定である。その他、地域産学官で立ち上げたさが機能性健康食品研究拠点「徐福フロンティアラボ」の運営委員長としてラボを軌道に乗せることも仕事の一つである。現代版徐福として健康長寿の食品を開発することを夢見ている。

先日、研究室同窓生が集まり国内外からのゲストとともに盛大な退任記念パーティーを催してくれた。多くの卒業生の笑顔と彼らとの思い出がフラッシュバックし、私に至福のときをもたらしてくれた。同窓会の皆様には長い間お世話になり感謝申し上げます。
(2012 .3 .16 .)

佐賀大学卒業式・入学式、農学部同窓会長賞授与

佐賀大学の学位授与式が平成24年3月23日、佐賀市文化会館で行われました。全学5学部（文化教育、経済、医学、理工、農学）及び大学院修士課程で1736名、うち農学部では165名が学部卒業、42名が大学院修士課程を修了しました。

また当日は農学部恒例の「祝賀会」がホテル・ニューオータニ佐賀で開催され、農学部同窓会長賞が3名に授与されました。受賞者から頂いた手記は次のとおりです。

なお、4月3日には平成24年度の入学式が佐賀市文化会館で行われ、各学部・大学院の1840名、うち農学部181名、大学院50名が入学しました。



同窓会長賞 授与

農学部同窓会長賞 受賞者の手記

古賀 咲江（応用生物科学科）

農学部同窓会長賞という過分な表彰をしていただき、恐縮していると同時に、大変ありがたく思っています。私は卒業論文研究として、微生物発酵茶の新規成分であり、抗メタボリックシンドローム活性を有するテアデノール類の精製法について実験させていただきました。私を取り組みたい研究を思う存分できたのも、この佐賀



大学を学び舎として選んだからだと思います。私はこの春、佐賀県庁に入庁し、県職員として働く事が決まっています。4年生のとき、県職に合格後は、佐賀大学生協主催の公務員講座でボランティアのアドバイザーとして後輩の面接指導や勉強相談をさせていただきました。卒業研究やアドバイザー活動を進める上で得た、学ぶ姿勢、あきらめない気持ち、感謝の気持ちなどを忘れることなく、人の喜びを自分の喜びとして感じることができるような県職員に

なりたいと思います。

甲斐 俊一 (農学研究科 応用生物科学専攻)



食品栄養化学分野の甲斐俊一です。
このような名誉ある賞を頂き、大変嬉しく思っております。

現在、食環境を含めた生活スタイルの変化により、生活習慣病やメタボリックシンドロームが増加しており、その結果死亡リスクの上位を占める心臓血管病や脳血管障害など動脈硬化性疾患の増加が世界的な問題となっています。生活習慣病やメタボリックシンドロームを予防・改善する為に、食事への機能性成分の導入が有効であると考えられており、私が所属する食品栄養化学研究室では、そのような機能性を有する成分の探索や、作用メカニズムの解明を行っています。

私も、研究生活の中で、様々な食品由来成分について研究しましたが、困難に直面しつつも楽しく研究を進めることが出来たのは、柳田先生、永尾先生を始めとした先生方や先輩方、また、友人や後輩、そして両親など、様々な人に支えられたからこそです。

お世話になった全ての人への感謝を忘れず、今後は研究生生活を通して得たものを糧とし、社会に還し

ていきたいと思います。

ありがとうございました。

織田 得郎 (農学研究科 生物資源科学専攻)



今回、このような名誉ある賞を頂き、誠にありがとうございます。

研究室の主な研究テーマは、氷温付近でも活発に増殖する南極産好冷細菌を材料に、低温酵素の活性発現機構の解明、それに酵素活性や安定性を変えるためのタンパク質工学的的方法の開発です。タンパク質構造の中にひそむ機能に必要な動きを生み出す仕組みを知ることを目指しています。

私は鳥栖市にある佐賀県立九州シンクロトロン光研究センターでタンパク質構造解析を行い、グルコキナーゼという酵素の立体構造(PDB ID: 3VPZ)の解明に成功し、低温適応機構と高い熱安定性の謎を明らかにしました。その研究結果が認められ、蛋白質と酵素の構造と機能に関するシンポジウムにおいて、最優秀ポスター賞を受賞することが出来ました。研究の機会を与えてくださった渡邊先生や本島先生を始め、切磋琢磨した研究室の仲間、勉強を続けさせてくれた両親など沢山の皆様のおかげです。素敵な出会いに感謝し、社会に大きく貢献出来るようこれからも頑張ります。

在学生への支援活動

全学部学生を対象に平成17年から始まった「キャリアデザイン講座」の講師として平成24年1月11日には島田達生(S42年卒・保護)氏、1月18日には陣内章圭(H19年卒・応用生物科学)氏が担当されました。両氏の概要は次のとおりです。

私の生き方、楽しく生きる

大分大学名誉教授

大分医学技術専門学校校長 **島田 達生**



昭和42年3月、農学部農学科植物保護学専攻を卒業した(写真)。

4年間テニス(ソフトテニス)に明け暮れ、まさにテニスが私の恋人であった。おかげで九州国体や全日本選抜に出場できた。テニスの試合以外、すべての授業に欠席がなく、欠点がなかったことは、私にとって意義あることでした。また、卒業研究は、みかんの潰瘍病の発生機序に関する内容で、厳しく怖い野中福治先生の指導と仲間が研究に熱中する姿に刺激されて、私も学会発表(九州地方会)ができた。



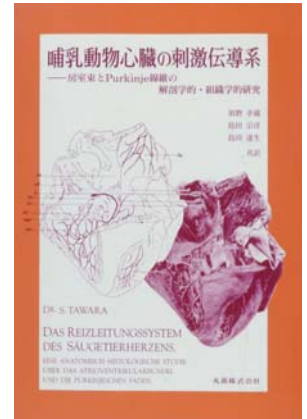
楽しい学生生活だった。

いったん民間に就職したが、教員になりたい希望があった。先輩田中幸男先生の仲介により、久留米大学医学部解剖学講座に助手として再就職した。研

研究者への道に大きな不安を感じていたが、恩師野中先生は私に“一生懸命やれば必ず道は開ける”という助言をいただいた。まったく異なる解剖への道、10年間ただがむしゃらに仕事(勉強)をした。夜12時に帰るのが常で、徹夜もした。おかげで医学博士の学位をとり、助教授にもなった。そんな折、新設される大分医科大学への誘いがあった。地位はかわらない。研究設備が悪く、研究費は少ない。給料も下がる。何もいいことがない。そこで、また野中先生に相談した。“人事は自分ではなく、他人(ひと)が決めるものだ。与えられた場で精一杯研鑽することが大事だ”。その言葉で大分行きを決めた。以後、「行雲流水」を私の道標とした。

大分に移って、私は変わった。何か不思議なことがあると、すぐ実験してそのなぞ解きに挑戦した。最初の無我夢中の10年が大きな財産となり、よく観て物事を考える力がついていった。そのことが研究の楽しみに変えた。

平成21年3月、大分大学医学部を退職し、その祝賀会に恩師、野中ご夫妻が参加してくださったことは、大きな喜びでした。現在、大分医学技術専門学校(柔道整復師科と鍼灸師科)の校長をしている。65歳から柔道を始め、黒帯をとった時の喜びは最高だった。一生精進、常に前進。これからも楽しく生きる。



(株)POLA 美容スタッフ

陣内 章圭



初めまして、平成19年3月農学部応用生物科学科卒業の陣内です。

私は化粧品会社(株)POLAで、販売員の美容の指導や販売支援をする美容スタッフという仕事をしています。

大学時代は勉強だけでなく、サークルやアルバイトにも明け暮れていました。

入学当初は、生物教師の夢があり、学部と教員免許用の授業を平行して受けていました。実際に教育実習も受けてみたら思い描いていたものと違い、就職活動に踏み切りました。ただ、どうやって始めればいいのか右も左もわからず、就職課の扉を開けたことで徐々に方向が定まってきました。さまざまな企業の会社説明会に参加し、「人に関わる仕事に就きたい、人を大切にする企業で働きたい」と思い、縁があったのが今の仕事でした。

実際に経験してみて「就職活動=会社とお見合い活動」と思いました。会社との相性をみるために面接があるのだから、自分を創ってよく見せようとするのではなく、ありのままの自分を見せて受け入れてもらえるかをみた方が就職後も働きやすいと思います。

就職活動でやってよかった二つをお伝えします。

- ①就職課に通う：就職課には就職活動の経験者がいらっしゃって、たくさんのヒントを戴きました。
- ②就職ノートを作る：就職ノートといっても、中身は「自分の強み・弱み」や「大学生活で得たもの、経験」などをテーマごとに整理したものです。面接で聞かれそうなことを書いて、添削してもらっていました。そうすることで、自分を見つめ直せ、履歴書や面接でも状況に合わせて返答することができました。就職は会社との相性といっても、会社に自分の良さを売り込めなければ、会社側に自分の良さが伝わらないので意味がありません。当たり前やってきた「他の人にはない自分の味=強み」の一言キャッチフレーズを作っておくのは、役に立ちました。実際に働いてみて、大学生活の経験はとても貴重なものだったのだと感じます。時間がたくさんあるからこそ普段できないことに取り組み、将来の人生設計を描いてもらいたいです。

私という小さな存在が働くことを通して、社会の役に立っていることに感謝しながら、毎日いい意味でもがいています。

まだ社会人6年目ですが、皆様のお役に立てることができたのであれば、幸いです。この場をお借りして、お世話になった石丸教授、就職課の副島先生、その他の皆様、ありがとうございます。

会員の広場

インドネシアでの田舎暮らし

田中 欽二
(S 39年卒・保護)



S. M. Widyastuti (修士課程 平成元年修了)さんが学位論文(鹿児島連大 平成3年3月)を書き終え、帰国する折に是非 Somowiyarjo Susanto (修士課程 昭和61年修了)さんの実家で過ごしてみませんかと勧められた。定年退職後でも行きますと約束したものの放送大学や自治会の会長等で延び延びになっていた。

昨年3月に若者が会長職を引き受けてくれたので雪と寒さの農作業の出来ない2月に妻と妻の中学校のときの友人(ロンドン在住)3人で出かけることになった。

バリ島で一泊し、翌日は観光旅行(銀細工、織物工房、パロン舞踏など)した。ジョクジャカルタ空港にはスサムトさんが迎えに来てくれ、2年ぶりの再会であった。その日はインドネシアの伝統料理を御馳走になり、スサムトさん宅に一泊した。

2月4日は朝食後に Bayuran にある実家に向けて出発した。

ジョクジャカルタから南に1時間程行くと田植が終わった水田が広がり、さらに30分も走ると黄金色の稲穂の垂れ下がった水田が広がっていた。

実家は広い屋敷中にあり(写真1)、ヤシの大木の下にバナナやココアなどが植えてあり、築80年の家は環境に配慮した造りで、赤道直下でも日中は30~34℃になるが夜は27℃まで下がり、涼しい風が吹



写真1



写真2



写真3

いてきて快適に過ごすことができました。

私は4時30分の礼拝場からの呼びかけの音で起床し、薪に火をつけ(湯沸かし)、ナマズとグラミ(淡水魚)に浮き草を池から掬って与えた。朝食後はヤシなどの樹木を伝わってくる木漏れ陽の当たる場所に竹で枠を作り土を盛り、ネギ、ホウレンソウ、ササゲ、落花生、ニガウリなどを播種した。また記念樹(ドリアン、ジャクフルーツ、パパイヤなど)を植えるための塹壕[100×60×70(H)cm]掘り(写真2) 生垣を補修したり、生い繁った竹の伐採などで一ヶ月があっという間に終わりました。

スサムトさんが推進している小さい農業(Eco-farming = 身の回りにある物を利用する)の実態を垣間見ることができ、これからの日本農業の有り方に参考にしたいものです。現在TPPに対応して日本政府は(農林水産省)や農協が進めている大規模化農業(20~30ha)の危うさが懸念されます。

小さい農業では自然を生かし、創意工夫が養われますが大きい農業では面積をこなすことに気が囚われ、機械や化学肥料・農薬(除草剤)に依存した農産物を生産し、環境破壊を押し進めるような気がします。

インドネシアでは代掻き、田植え、除草、稲刈り、脱穀などが手作業で家族総出で行われており(写真3)、昭和30年代の日本の状況で中学生の時の楽しい思い出が蘇ってきました。

汗を流すことを厭わない人は是非お出かけ下さい。ナマズとグラミの燻製を作ってお待ちしております。

スサムト夫妻も喜んで迎えてくれるでしょう。今年も1~2月にかけて訪問することを約束してきました。



「東海道を走る自転車一人旅」と題する旅行記が古川辰馬(S40年卒・育種)氏から寄稿されましたが、紙面の都合でその概要のみを掲載します。全文の閲覧は「佐賀大学同窓会ホームページ・農学部同窓会・会員の広場」でお願いします。または、同窓会事務局へお尋ねください。

「東海道を走る自転車一人旅」

古川 辰馬

(S40年卒・育種)

平成24年4月14~18日の5日間、京都から東京まで自転車で走った。目的は、東京で開催される農学部同窓会(40年卒)に参加すること、もう一つ、自転車では未知の世界である京都から先を走ることの二つであった。

これまでの自転車旅行は全て、自転車で自宅を出発し、自転車で自宅に戻るといったパターンだったが、今回は京都から走り出すため、列車で佐賀をスタート、帰りは飛行機で佐賀に戻るといった、初めてのパターンとなった。

天候に恵まれたこともあり、事故もなく無事この旅を終えることができた。今回の旅でどんな準備をし、また、道中、何を見、どんなことを感じたか等について整理してみた。

1. 行程

月日 (旧道の距離)	日	程
4月 14日(土) (60km)	福岡	京都(三条大橋) 水口(泊) (佐賀みどり2号7:31~博多8:09) (自転車) (滋賀県甲賀市) (新幹線 博多8:30~京都11:15)
15日(日) (106km)	水口	名古屋 安城(泊) (自転車) (愛知県)
16日(月) (104km)	安城	浜松 掛川(泊) (自転車) (静岡県)

17日(火) (108km)	掛川	静岡 (自転車)	三島(泊) (静岡県)
18日(水) (112km)	三島	横浜 (自転車)	東京(日本橋)
19~21日	東京滞在(都内サイクリング、同窓会等)		
22日	羽田空港	佐賀空港	

2. 道中の主な出来事、感想

- ①京都から東京までのコースは国道1号線を選んだ。理由は、1号線の前身が旧東海道であり、ここを走れば、昔の旅人が見たり感じたりしたであろうことに少しは近づけるかもしれないと思ったから。
- ②「東海道53次」は53宿のうち28宿を走った。いずれの宿も、今もそこで生活が営まれており、木造、格子戸、道の両側に向き合った屋並み等に昔の面影が残っていた。また、道中、所々で松並木を見た。初めての土地、しかも自分が今いる位置が判然としない者にとって、今も松並木は最も安心感を与えてくれる「道しるべ」であった。
- ③道中、最大の難所は箱根八里、麓の三島市との高度差800mの箱根峠を越えるのに3時間を要した。また小田原までの下りも急坂のヘヤピンカーブの連続で、これまで経験したことのない緊張の連続だった。
- ④終点、お江戸日本橋には京の三条大橋を発って5日目に到着(走行距離579km)江戸時代の旅人の苦勞、喜びを少しだけ実感できた。



3. 道中の景観など



「横田の渡し大常夜灯」(滋賀県甲賀市)
常夜灯は今でいう街灯、夜道の安全のため街道沿いに設置されていた。



「御油の松並木」(愛知県豊川市)
旅人の安全を守る松並木、東海道の最も保存状態がいいとされる。



宿場町と街道(滋賀県土山宿)
格子戸、向かい合う屋並み、狭い道路の典型的な昔の街並み。



大井川(静岡県島田市)

新大井川橋(国道1号)の自転車道、昔は平均水深76cmの急流だった。今はご覧の通り。



富士山(静岡県三島市)

箱根四里の出发点三島宿から望む富士山、この晴天と富士山が箱根峠への辛い登りを後押ししてくれた。



終点(東京・日本橋)

東海道の始点であり、終点であった日本橋、後ろの高速道はこの歴史的場所にはなじまない。

支部 だより

佐賀県庁支部

「佐賀県庁支部」先輩を送る会を開催

佐賀県庁支部では、去る3月14日に佐賀市の「グランデはがくれ」において、平成24年3月末をもってご退職される2名の「先輩を送る会」を開催しました。

今回は、福島末行様（S50年卒・果樹学）と服部二郎様（S50年卒・土地改良学）が県庁を退職されました。お二人は、県に奉職されて以来、池田・香月・井本・古川の四知事の下、37年間の永きにわたり佐賀県の農業や農村の振興・発展に大きく貢献されました。

当日は、「佐賀県庁支部旗」の下、先輩方への花束や記念品の贈呈、参加者全員での記念撮影、更には、お誂い三番の披露を行いました。祝宴では、先輩方を囲み会員約50名が県庁生活の思い出や苦労話を伺うとともに、アフターファイブや趣味の話題などに話の花が咲き、楽しいひとときを過ごしました。

先輩方には、今後益々ご健勝でご活躍されることをお祈り申し上げます。

（佐賀県庁支部長 森田 昭 S52年卒・農経）



佐賀県支部の総会

佐賀県支部は、平成24年5月26日に佐賀市の「グランデはがくれ」で平成24年度総会を開催しました。当日は会員92名のうち21名が参加し、来賓として農学部の藤田修二学部長、当会員で農学部同窓会の金丸安隆（S43年卒・畜産）会長にご出席頂きました。

総会では物故者への黙祷後、加々良光彦（S37年卒・農業土木）支部長の挨拶と支部活動の報告、来賓の藤田学部長と金丸会長より、農学部及び同窓会の近況についてお話を頂きました。

昨年度の事業、会計報告などに続いて、新入会員2名の紹介がありました。なお、今年度は役員改選があり、支部長に坂本隆昭（S37年卒・農経）氏、大久保晴海（継続 S41年卒・園芸）氏、澤野兵五（S44年卒・育種）氏、田中龍臣（S45年卒・園芸）氏、福岡直昭（S46年卒・干拓水工）氏が承認されました。

内田健右（S31年卒・作物）氏の乾杯、その後約2時間、会員が相互に懇親を深め、最後は本支部顧問の高木胖（S36年卒・育種、佐賀大学名誉教授）氏の万歳三唱で閉会しました。

なお、本支部は平成20年2月に、佐賀県内在住で他の支部に所属されていない同窓生の組織として発足しましたが、まだ未加入の方々が多数おられます。今後、本支部への加入を勧め、会員相互の親睦を深めていくことになりました。

（村岡 実、S46年卒・保護）



自営者の会

佐賀大学農学部同窓会支部『農業自営者の会』は、平成24年2月11日に佐賀市の「久坊」で平成23年度の総会及び懇親会を開催しました。参加者は主に佐賀県内から19名、うち同窓会本部から金丸安隆会長（S43年卒・畜産）、村岡 実会報編集長（S46年卒・保護）にご出席頂き盛会でした。山田和由会長（S49年卒・農経）、金丸安隆同窓会長にご挨拶を



得た後、参加者全員の近況報告と情報・意見交換などで約2時間の懇親会を行いました。最後に、村岡高芳会員（S33年卒・畜産）の次年度の再会を祈念した力強い万歳三唱で閉じました。

佐賀大学農学部同窓会支部『農業自営者の会』は、平成9年2月1日に佐賀市内はがくれ荘にて、会員32名の出席で設立総会を開催しスタートしました。

設立時、本学部同窓生の自営農業者を主体に、退職就農者、Uターン就農者などを含む正会員43名、準会員13名で組織されましたが、若干減少傾向にあります。近年、就農された同窓生もいますが、本自営者の会への加入を呼び掛けています。

（白武 義治 S51年卒・農経）

佐賀の風景



佐賀大和川上峡の初夏
嘉瀬川に泳ぐ「鯉のぼり」と「与止姫神社」



佐賀平野の麦秋

編集後記

農学部同窓生の皆さん、お元気でお過ごしのことと思います。

東日本大震災と東京電力福島原発事故の後処理もまだ山積し、若者の就職難、非正規雇用、低賃金、長時間勤務などの状況が未だに改善される目途はありません。また「うつ病」疾患の増加、自殺者年3万人がここ10年以上も続く現状は、健全な社会とは思えません。

奇しくも、本年度総会後の記念講話では、佐賀大学健康管理センター 佐藤 武所長から「うつ病」の予防対策として、人と語り合える関係、絆の大切さを改めて思い知りました。同窓会も総会や各支部での会員相互の交流親睦を重要な活動としていますが、全国津々浦々の会員相互の最大の絆は年2回の会報「ありあけ」であろうとの思いから、会報編集に努めてきました。しかし、予算との関係で会費未納者への会報配布停止、カラー印刷や頁数が制約されています。

そこで、今回からは会報に掲載できなかった玉稿

などを「佐賀大学同窓会ホームページ、農学部同窓会、会員の広場」に掲載することに致しました。インターネットで閲覧可能な方は是非ご利用ください。

さて、平成24年5月21日は本州、四国、九州の太平洋側の広い带状地帯で午前7時30分前後に「金環日食」が観察されました。この規模での「金環日食」は932年ぶり、今回は300年後とのことで、私たちの居住地である地球の宇宙における壮大で絶妙な取り合わせを体感することができました。宇宙からの芸術ともいえる「金環日食」の空を見上げて、この人間社会の現在と行く末に何をなし、何を為すべきではないかと、想いを新たにされた方も多かったのではないかと思います。

今年3月に農学部を退官された半田駿、柳田晃良の両先生、インドネシア旅行記の田中欽二佐賀大学名誉教授、同窓会長賞受賞者の学生3名、その他の方々から「ありあけ」第10号に玉稿を頂き、末尾ながらお礼申し上げます。

今回の「ありあけ」11号は平成25年1月1日発行予定です。多くの方々からの近況報告をお待ちしています。